No.43
2010. 6. 5

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■「プロジェクト」から「プログラム」へ……1
■タマン族の村で、幸せを分かち合った！……2～3
■ラオス森の交流ツアー報告……4～5
■「プノム・チソーの希望」への道……6
■地球の木カフェ・カンボジアスペシャル……6
■ハイチ大地震復興支援報告……7
■里親支援もあと一年……7
■事務局新スタッフです……7
■活動日誌……7
■INFORMATION……8

「プロジェクト」から「プログラム」へ

理事長　丸谷士都子

ネパールの山間部。少なくとも4時間はかかる山道を歩いて、10人の農民たちは会いに来てくれた。若い男性もいれば、乳飲み子を抱えた母親もいる。村でもっとも僻地の山の斜面に住むこの人たちは、700世帯が住むマンガルタール村の中でも一番厳しい生活をしている。収入創出プログラムの参加者として選ばれたラジャバス集落の人たちだ。日本から来た私たちに初めて対面し、ちょっと緊張気味のようだった。

私は、「村で一番好きなところはどこですか？」とたずねた。とたんに前に座っていた農民たちの顔に笑顔がはじけた。「いろいろなカーストの人たちが住んでいますが、助け合って暮らしているところです」「森が深く、涼しい」「私たちの集落では今、しゃくなげが真っ盛りで、とてもきれいです。今度ぜひ見に来てください」それから話はなごやかにはずんでいった。にんにく、じゃがいも、いんげんなどを植えている。夢は、よりよい野菜の育て方を知ることだそうだ。

もし「あなたたちの困っていることは何ですか？」と聞いたとする。困っていることを次々にあげていくと、自分たちの生活が問題であふれているような錯覚を抱いてしまうことだろう。まずは村のよいところに注目する。便利なものに囲まれた生活をしている私たちは、ともすれば「ないもの」を探してしまいがちだ。一緒に「あるもの」を見ていくことにより、村人たちは自信を持ち、固有の文化への誇りを高めることができる。村人主体の活動を進めていく上でもっとも大切なことである。

国際援助の現場では、「途上国を近代化する」という視点の欧米型の援助に始まり、技術移転型の援助へと移っていった経緯がある。先進国の暮らし方をお手本として、それに近づけようとする開発や、先端の技術を持ち込むような援助は必ずしも現地にふさわしいものではなく、多額の資金が注ぎ込まれることにより利権も生じた。1970年代には、「参加型開発」という、もうひとつの取り組みが始まった。村人自らが必要な改善点を見つけ、計画・実行していくものである。村の文化を基本とし、自然を大切にし、村人が平等に利益を得るような村の発展のあり方である。

ラジャバス集落の人たちと（2010年3月ネパールスタディツアー）

地球の木では、昨年度立ち上げた「プロジェクト連絡会」を、ラオス、カンボジア、ネパールの各プロジェクトについて情報交換する場とした。そこで地球の木の支援のあり方が話し合われた。また、「援助する前に考えよう」というワークショップをリーダー研修としておこない、現場でしばしばおこる、援助する側とされる側の考え方のギャップについて学んだ。地球の木のこれまでのプロジェクトは、村の人たちの文化や伝統を尊重し、村人たち自身が決定権を持つ「参加型開発」を大切にし、村の暮らし方やコミュニティのあり方を知ると共に、日本での経験を伝え、学び合う関係づくりをしてきた。私たちはこのような方向性を更にはっきりと意識するため、期限を決めて支援する側が事業をおこなう、という意味合いが強い「プロジェクト」という名称の使用をやめ、住民主体である「プログラム」という言い方に変更することにした。

大型開発が急激に進むラオス・サワナケート県では、生活の変化を迫られている村人たちが文化を守りながら権利について学習し、森林保全や農業の活動に取り組んでいる。カンボジアの貧困地域であるタケオでは、少女たちが手に職をつけ、伝統の絣のシルクを織りながら自立への希望をかなえようとしている。今後も海外プログラムについてつねにふりかえりつつ、地球の木にふさわしい新規プログラムも考えていきたい。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

地球の木ネパールスタディツアー報告（3/14～3/22）

タマン族の村で、幸せを分かち合った！

今回のツアーの主な目的は、地球の木と現地パートナーSAGUNがマンガルタール村の人々と進めているプログラム「幸せ分かち合いムーブメント」の現場を訪れ、住民主体の参加型村づくりについて学ぶことだった。

ネパールの首都カトマンズからおよそ75キロの山あいのピンタリ集落。五色の旗タルチョーが私たちをやさしく迎えてくれた。2007年から始まった地球の木のプログラム「幸せ分かち合いムーブメント」。その不思議な名前からして、どうも巷の援助とは響きが違う。一体どんな支援が行われているのだろうか……。20代から60代のツアーメンバーは、興味津々、タマン族の村を訪れた。

カマルさんワークショップ

今回のスタディツアーの目玉は、世界各地で活躍している参加型開発の専門家カマル・フヤルさんのワークショップ。カマルさん曰く「開発とは人々が幸せを分かち合うこと」。村人たちの持っている潜在能力を引き出し、村人主体の開発モデル作りを目指している。

ツアーメンバーは村に入る前に、ネパールについて、「幸せを分かち合う」村づくりの概念やその手法について一つひとつじっくりと時間を掛けて学んだ。

交流も盛りだくさん

「幸せ分かち合いムーブメント」の拠点となっている高校での生徒・先生方との交流、集落ではお母さんたちとのワークショップ、収入創出プログラム参加者たちとの話し合いなど、支援に関わる多くの村人たちと交流する機会があった。

「幸せ分かち合いムーブメント」は住民の参加を尊重する村づくりを支援しているが、今回のツアーのキーワードも「参加型」。ツアーメンバーたちは主体的に企画から参加した。手作りの日本紹介カルタを使ったワークショップで文化の継承の大切さを伝えたり、ダンスや茶道のお手前の披露や、積極的に村の人たちの仕事の手伝いなどをして心を通い合わせた。

訪問を重ねるたびに村の人たちとの距離が縮まっていく。ツアーメンバーの活躍でムーブメントが躍動感を増し、一歩前進したのを感じた。

旅行日程

3/14　成田発バンコク泊
3/15　カトマンズ着、ネワール族の町ドゥリケルへ
　　ワークショップ1「ネパールを知る」
3/16　ワークショップ2「参加型村づくり」
3/17　マンガルタール村へ　高校生と交流
　　タマン族の住むピンタリ集落でホームステイ
3/18　村人とワークショップ
　　お母さんたちの識字教室訪問、ホームステイ
3/19　高校で奨学生・地区担当者たちと交流
　　カトマンズに移動、市内見学
3/20　SOARSセンター（イマドール村）へ
　　ユースクラブと交流
3/21　ユースクラブ会長宅訪問、バンコクへ
3/22　成田着

ツアーメンバーの感想

地球の木の考え方やカマル氏のワークショップでの学習内容が、実際どのような形で展開、実践されてきたのかを実感できた。これまで地球の木が積み重ねてきた活動実績、結果が形となって見えた。単なる友好な関係を超えた、強く、確かで、深い信頼の絆で結ばれた姿だった。

"幸せ分かち合い"（ちょっと気恥ずかしく、口にするには少々の勇気を必要とする言葉だが……）とは、こういう事だったのかと改めて思う。これまでの途上国への開発援助と言えば、どうしても、する側、される側双方の様々な思惑、利権のからんだうさん臭さと不透明さが感じられた。巨大ハコモノプロジェクトは、往々に末端や貧困層まで届かないどころか、環境破壊や住民の生活さえも奪う。これでは開発援助の名のもとの暴力に変わりない。地球の木が生まれた背景は、こんな状況に対し「NON！」の声を上げたのではないだろうか。そして今、小規模ながら地道な活動の積み上げで、着実に地球の木の根がしっかりと張り、実を結んできているように思う。

今回のツアーをとおして、本当の意味での支援する事のとてつもない難しさとそれを持続させる力の重要さと言うものを学ばせて頂いた。（増田新治）

家族の原点を想う

私がホームステイした家は、4世代家族でした。ママ（おばあちゃん）が歩いているところは見たことがありません。ママはいつも1階の自分のベッドの上か窓の外の腰掛スペースに細い足をたたむように座って、子どもたちを見ていたり、私に話しかけたりします。でもそれは、人のあるべき姿だなと思いました。原始の家族には、介護という概念がなかったのではないかと感じました。

なぜ今日本では、老人の介護が大変なのでしょう。委託介護それ自体が悪いとは言いません。ただ、どうしてそれが必要なほどこの国は忙しいのだろうかと思います。そして逆に、原始の家族では、人はどうやって老いて、どうやって死んで行ったのだろうと気になりました。

（田島沙耶、大学生）

心がデトックス

ピンタリ集落での2日間は、本当に私の人生の中でかけがえのないものになった。村でのゆっくりとした時間の流れで、心がすっかりデトックスされた。．帰国してから1ヵ月程経過し、都会の雑踏の中で再びせわしなく暮らしている自分に気づき、明日からはまた歩く速さを少しゆっくりしようと思う。

（齋藤麻衣子）

一生の思い出をありがとう！

私はネパールに行くまで、ネパールの女性たちは男性に比べ大した権限もなく、仕事ばかり押し付けられ虐げられているものとばかり思っていました。しかし、実際にピンタリ集落を訪れ、彼女たちに触れてみるとその考えは大きな間違いだと気づかされました。確かに、男たちがバレーボールをして遊んだり、昼寝をしている間も忙しそうに働いているアマ（おかあさん）たちですが、彼女たちの顔にはいつも笑顔があり、自分たちの仕事に誇りを持っていて、村のどの男性よりも強く、輝いて見えました。決して下を向かない強く優しいアマたちに支えられて、ピンタリという温かい村は、そこに住む家族たちで成り立っているのだろうと思いました。そんな彼女たちとの出会いは私にとって一生物の「思い出」という名の宝物を残してくれました。その宝物を胸に、これからの日々もがんばっていきたいと思います。

（安田健太、大学生）

学んだことを地域活動に

SAGUNの働きかけで、村人たちが自分たちの良いところを探し、より良い暮らしを模索し続けた成果を見ることができました。奨学金を受けて学び続ける高校生、農業トレーニングを受け、野菜の生産量を増やして町まで売りに行くようになった農民、識字教室の先生になった元奨学生たち……。

大きな金額で立派な建物を建てるよりも、人を育てることの大切さを知りました。村づくりは自分の住む村を大切に思える人や良きリーダーを育てることが肝心だと気付かされました。ピンタリ集落の人々との出会いを大切にしながら、これからも自分の地域活動を続けていこうと思います。

（塩入真知子、スタディツアー2度目の参加）

YES, WE CAN!!

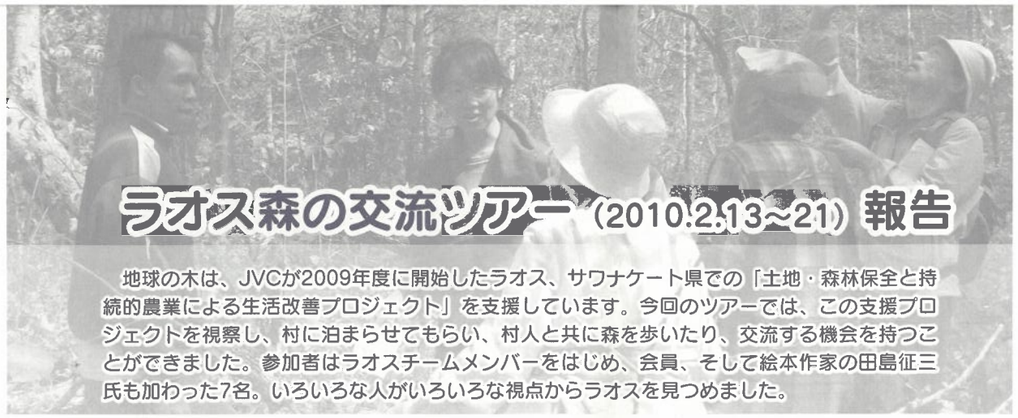
満天の星を仰ぎながら、私たちは女性の識字教室を訪問した。識字教室はムーブメントの一環ではないが、極西部で12年間教育支援を行ってきた私たちにとっては、とても興味深い。水不足による停電のため、ポータブル電灯の明かりを頼りに話し合いが行われていた。2年間の予定だった識字教室があと2ヵ月で終了する。「もっと読み書きを習いたい」と主張する女性たちと「識字の後は、おもちゃ作りなどの収入創出プログラムをやりましょう」と進めるカトマンズから来たNGOの男性との話合いは平行線を辿っているようで、傍聴していた私たちスタディツアーメンバーはうとうとし始めた。そんな時、闇を破って、母親クラブのリーダー、クンジャマヤさんの一撃が私の目を見開かせた。

「支援を受けなくても、私たちの力で何かできるのではないかしら」

この言葉に、やっぱりピンタリ集落の女性はすごいと感動したのは私だけではなかったろう。

（乳井京子、ツアー・アシスタント）

追悼：SAGUNの理事で事務局次長のベース・クマル・タマンさんが今年2月2日、交通事故で逝去されました。「幸せ分かち合いムーブメント」への貢献に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。



ラオス森の交流ツアー（2010.2.13～21）報告

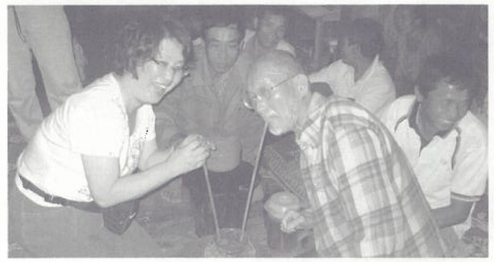
地球の木は、JVCが2009年度に開始したラオス、サワナケート県での「土地・森林保全と持続的農業による生活改善プロジェクト」を支援しています。今回のツアーでは、この支援プロジェクトを視察し、村に泊まらせてもらい、村人と共に森を歩いたり、交流する機会を持つことができました。参加者はラオスチームメンバーをはじめ、会員、そして絵本作家の田島征三氏も加わった7名。いろいろな人がいろいろな視点からラオスを見つめました。

ケンメオ村（人口約820人、115世帯）

「遠い所をよく来てくれた」

JVCの車で、サワナケートからケンメオ村への移動の途中、「稲作幼苗一本植え」という技術を使って米の収穫量増加を図っているJVC試験田へ寄りました。これは日本のアジア学院で学んで昨年末帰国した、フンパンさんが中心になって進められているプロジェクトです。一本植えした苗が3週間で5～6本に分蘖（ぶんけつ）して元気に育っていました。

そこから車で5時間、暗くなったデコボコ道を、車のライトを頼りに走りやっと目的の村に着きました。車を降りると外は満点の星空。都会では見られない「天の川」にしばし見とれてしまいました。



ストローで村の酒を飲む

村人も「遠い所をよく来てくれた」と副村長さん宅で「カオニャオ（もち米）」や「ラープ（ひき肉と香草の炒め物）」、日本の卵焼きに似た料理などで歓迎してくれました。早速日本からの日本酒と村人の「ラオラオ」で酒盛りが始まりました。同じお米から作るお酒なので、作り方など話が弾みました。村の話や、子どものこと、また将来の希望など皆うちとけて次々に語ってくれました。（豊田由紀子）

村人と森を歩く

村人に近くの村を案内してもらった。森に入るとすぐに何種類かのラープに使われる木の葉があった。さらに進むと頭の上に木の葉でできた蟻の巣が見られた。これを巣ごと取り中の卵を食べるそうだ。ラタンの幼木があり、実がついていた。ラタンの実は熟すとおいしいとのことだった。目の前の日本のススキを大きくしたような植物は、村人がほうきの材料にするのだと教えてくれた。前方に小さな竹林が見えた。この辺の景色は日本でも見られそうな気がした。

少し枯れかけた大きな木の高いところに黄色の樹液が固まったものが見えた。防水用の樹脂と爆薬用の材料に使用されるというものだった。その他にも自然乾燥したきのこ、フタバガキの実などがみられた。ここはパーコークと呼ばれる乾燥した植生の森であるが、村人がこの森を利用し、森から多くの食べ物や生活用品を得て生活していることがよく理解できた。（山本正俊）

ファイサイ村（人口590人、144世帯）

自分たちの土地を守るために（自然資源保護のワークショップ見学）

村の中ほどにある集会所に村長、副村長を始めとして多くの村人が集まってきた。JVCが現在力を入れているのは、新土地森林委譲の法律により、新たに認められた村の共有地の権利やそれに関する法律を村人に知らせ、彼らが正当な権利を主張できるようにするための活動だ。このワークショップは、JVCのラオス人スタッフ、ペタワンさん、レノル君を中心に行なわれ、村の言葉ブルー語に通訳するのはホンケオさんだ。

以前村人と共に抽出したこの村の問題は、森が減少し、林産物などの自然資源が減っていることだった。村人の関心も高いのか、どんどん人が増え、入りきれないほど集まった。法律が専門のレノル君は、JVCなどラオスに関わるNGO団体で作成した、法律をわかりやすく絵で表現した森の教育カレンダーや絵本を使って、村人に新しい法律や彼らの権利を知らせていく。「自分たちの土地を守るためには、村人の団結がとても大切」と話を結んだ。

自分たちの問題として考え、行動する力を村人につけてもらいたい。そのためにはラオス人スタッフを育てて、できるだけ任せていくというJVCのやり方を改めて見せてもらった。（中野真理子）

中学校でのワークショップ

15分程歩き中学校に着きました。学校の床は土で机も立派なものではありませんが、子どもたちの顔からは勉強しようという意欲が充分伝わってきました。時間が少なくて、予定していた、子どもたちと森に行き木の葉や実を使ってのアート作りはできませんでしたが、田島氏が、みずから持参したご自身の作品「ガオ」を読みました。登場人物は、木の実・葉・枝などを使って作り、絵本にしたものです。生徒たちはみんな目を輝かせて聞いていました。子どもたちの心の中に、どんなものが残ったのかは計り知れませんが、森に行った時にこの授業を思い出してくれればと思います。（松本陽子）

豊[illegible]食材がならぶ市

変わりゆくラオス

「ラオスは森の国」、国中が緑濃い木々に覆われているかのようなイメージを持ちます。しかし、1940年代には国土の70%だった森林面積が、今日では40%以下にまで低下しているという事実があります。

また、タイとラオスを結ぶメコン川の第2友好橋が完成したことで、タイ、ラオス、ベトナムを結ぶ東西回廊が開通し、良くも悪くも経済的な変化があり、人々の生活は影響を受けていくのでしょう。経済的には豊かになる人も出てくるかもしれない。しかし森がなくなり、現金収入もなく、法律のこともよく知らない村人は取り残されていくのではと懸念されます。

このようなラオスにおいて、支援地での苦労は計り知れませんが、JVCラオスの代表の平野さんや、若くて元気な現地スタッフの姿にたのもしさや希望を感じました。

私たちの役割は、支援地の情報をいかに日本の中に伝えるか、です。今回、絵本作家の田島征三氏が同行してくれたことは、私たちにとって大きな希望となりました。自分たちが見たラオスの現状をいかに伝えるか、という課題に新たな展開を感じさせてくれるからです。私たちも、日本での活動をいろいろ工夫しながらがんばろうと、気持ちを新たにすることができました。（武安ますみ）

ラオスツアーに初めて参加して

ゴミの心配そしてベトナム戦争の傷痕

村には井戸があり、その井戸水で朝の身支度をした。井戸の使い方に戸惑っていたら、少年が来て、使い方を手で示してくれた。井戸の周りには、シャンプーの容器が捨てられたままであった。

井戸を掘った人が、ゴミ処理の仕方を指導したと思うが、ここラオスでは、ゴミは土に還ると思い、そのビニール（プラスチック製）が溶けないまま、地下水に影響を及ぼすことに考えがいかない。日本人の尺度を使うまいと思いながらも、今回我々の土産のお菓子の小袋を拾って持ち帰る姿に、「日本人はゴミまで持って帰るほどケチなのか？」と村人に問われた。

次の日、ベトナム戦争の爆撃の痕が残るオールドセポンを訪問した。北爆は北ベトナムだけでなくラオスにもあったのだ。銀行の大金庫が焼けただれた姿でひとつだけポツンと残っていた。（下の写真）爆撃弾でえぐられたままの窪地がそのまま残る川べりの静かな場所だった。（木谷博子）

自分たちの生活を振り返る

ラオスを訪問して初めてわかったことがあった。それは森林伐採が地球温暖化や水害の被害拡大をもたらすだけでないということだ。外国企業が森林を買収、伐採後、ゴムの木やユーカリなどを単一植林することによって、森から恩恵を受けていた村人たちの生活を脅かしているという現実である。

多少の後ろめたさを感じつつ認識を新たにした。大量の紙やゴムを使用している我々日本人ができることは、どのようにしたら村人たちの生活を守りながら節度ある資源の利用ができるかを考え実行することだと感じた。

今回ラオスの人々と様々な場面でふれあったが、そのおだやかな国民性は日々の私たちのゆとりのなさを、振り返させてくれるのに充分だった。勤勉という雰囲気ではなかったが「貧しい国の豊かさ」を実感した旅だった。

（山本正俊）

この記事は、「Laos森のツアー2010年報告書」からの抜粋です。詳しくは報告書をお読みください。（1部300円）

Hope of Phnom Chiso
「プノン・チソーの希望」への道……

2010年2月に
センターを訪問

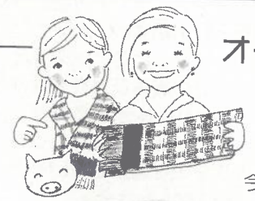
地球の木が扱っているクメールシルクのグッズには「Hope of Phnom Chiso」と書いたタッグが貼られているのをご存じだろうか？　プノンペン郊外タケオの広大な平野のただ中にそびえる丘「プノン・チソー」。アンコールワットよりも古い寺院遺跡のあるこの丘の参道登り口に、その職業訓練センターはある。このセンターを建てた日本のNGOの依頼で、地球の木が少女たちに機織りや裁縫技術を教えるお手伝いをするようになって3年。彼女たちとの信頼関係も深まり、こちらが注文する「日本で売れる製品」を作る意味も理解してもらえるようになった。少女たちの笑顔から自信もうかがえるようになってきたことは、前号の筒井の報告にあるとおりである。「Hope of Phnom Chiso」とは、そんな彼女たちが考えた「商標」なのである。

私たちは得てして、「自分たちがモノや金を贈って貧しい人びとを助ける」というストーリーで、「してあげる喜び」を得るという誘惑にかられる。しかし大切なのは、開発の受益者である住民自身が主体となってプロジェクトに参画し、公平にその恩恵を受け、エンパワーメントされていくことである。そこでは、私たちが外部者としてどう関われるかということが問われることになる。「可哀想だから出来が悪くても買ってあげる」では、その場かぎりの自己満足であるばかりか、彼女らの自立の妨げでさえある。

センターを維持し、生徒やスタッフが生活するための費用はどうするのか。技術アップに新商品開発、販路の開拓に卒業後の進路問題。地球の木だけの力では手に余るであろう数々の問題が立ちはだかっていることは、2月の訪問でもあきらかだった。この地域はもともと織物の里だが、織り手である村人は仲買人からわずかな工賃を得られるだけである。このセンターで技術を身につけた少女たちが、地球の木とのフェアトレードという形での生産・交易に自ら参画し、公平にその恩恵に浴することができるようにするには、どういう手だてが必要であるのか、私たちが学ばなければならないことも多い。

少女たちの思いのこもった手織りのスカーフ。足踏みミシンと炭火アイロンで作ったスカートやブックカバー。カイガラムシから採った自然染料で染織した絣。あなたがそれらを手に取ったとき、「プノン・チソーの希望」への一歩を踏み出していることだけは間違いない。

（プログラム連絡会担当理事　斎藤　聖）



オープンオフィス 地球の木カフェ
カンボジアスペシャル

3月28日（日）に地球の木関内事務所にて、恒例の地球の木カフェを開催しました。今回のカフェは「カンボジアスペシャル」。2月にタケオの職業訓練センターから仕入れてきたシルクのスカーフや小物など展示販売しました。初めてカラーのチラシを作成したこともあって、「この青いスカーフが欲しいのだけど……」とチラシを手に訪ねてきてくださった方、また、最近カンボジアへ行った方で、地球の木のクメールシルクの話を思い出し訪ねて来たという方々など。「どうしても今日はいけないので、クッションカバーを送ってください」というお電話もいただきました。

会場では、紐を張りめぐらし、廊下までを使って、部屋中にシルクのスカーフを飾りつけました。カンボジアらしい明るい色合いのもの、自然染色のアースカラーのものなど、様々な色や柄のスカーフで事務所の中はいつもとまったくちがった雰囲気で春一色でした。スカーフ以外には、ブックカバーやカンボジアの胡椒が入った巾着なども大人気でした。

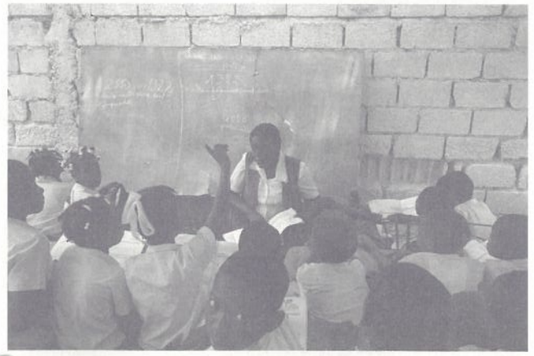
（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

ハイチ大地震 復興支援報告

2010年1月12日に起こったハイチ大地震に対して、地球の木では「かながわ復興支援ネットワーク」を通じて緊急支援をおこないました。皆様の募金は、ハイチで貧困層の子どもたちが通う学校を支援している神奈川の団体「ハイチの会セスラ」の学校再建に使わせていただきます。

現地では4月5日に仮設教室で授業が再開されましたが、親戚宅に身を寄せていたり、田舎に避難している子どもたちも大勢いて、全員がそろったわけではありません。学校が再開されることにより、子どもたちが希望を取り戻すだけでなく、地域の復興に向けて助け合う拠点にもなります。皆様からお寄せいただいた募金総額は298,060円でした。

ハイチの復興は、まだまだ時間がかかりそうです。今後も現地の様子を見守っていきたいと思います。皆様、ご支援どうもありがとうございました。（事務局長　筒井由紀子）


元気に学ぶ震災前の子どもたち

里親支援もあと一年

地球の木会員の皆様、新しい支援の形として始めた「カンボジア里親の会」の活動も残すところ一年となり、チャイルドケア・センターの子ども3人の近況のメールが「るしな」の松本さんから届きました。

3人は元気に毎日を送っており、ソッチャイは僧侶修行中。ソッチエはモロッポカフェで働きながら「るしな」の英文資料作成などを手伝い、カフェの人材が見つかったら「るしな」のスタッフに。サッカナはカフェで働きながら高校へ通っていたが、2月に中退。勉学と仕事の両立はむずかしいうえに、カンボジアでは高卒の資格は国の試験に合格しなければ取ることが出来ないとのことです。

最初の予定通り、子どもたちが20歳になるまで見守っていきます。　（カンボジア里親の会代表　佐々木慧子）

左からソッチェ、サッカナ、筆者

事務局新スタッフの山内ひろ子です

今年の1月末から、事務局で会員管理や会計を担当しています。新卒で就職して以来、システム開発・運用一本で働いてきた私ですが、1ヵ月間程のインターンを経て、地球の木でお世話になることになりました。

働き始めて早や数ヵ月、慣れない仕事に戸惑うこともありますが、日々、周りの方々の意識の高さを感じ、新鮮な毎日を過ごしています。至らない部分も多々あるかと思いますが、会員の皆様にも気持ちよくご協力いただくように頑張っていきますので、今後とも宜しくお願いします！

活動日誌（3月～5月抜粋）

3月　2日　出前講座「マジカルバナナ」（上尾市立大石中学校）
　　10日　地球の木サロン「実践英会話」
　　11日　第11回理事会
　14~22日　ネパールスタディツアー2010
　15~20日　カンボジアスカーフ展（WE21ジャパン相模原）
　　17日　地球の木サロン「実践英会話」
　　20日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
　　24日　出前講座「マジカルバナナ」（藤沢市立善行中学校）
　　地球の木サロン「Tea&Talk」
　　26日　第10回ブランチ連絡会
　　27日　地球の木サロン「エッセイ修行」
　　28日　地球の木カフェ「カンボジアスペシャル」
　27・28日　DEAR教材フェスタ2010参加（あーすプラザ）
　　29日　第12回理事会

4月　7日　地球の木サロン「実践英会話」
　　10日　Laos森のツアー報告会（横浜中央YMCA）
　　15日　第13回理事会
　　19日　第11回ブランチ連絡会
　　21日　監査
　　24日　地球の木サロン「エッセイ修行」「ハングルに親しむ」
　　28日　地球の木サロン「Tea&Talk」
　　30日　第14回理事会

5月　2日　横浜インターナショナルスクールフードフェスタ参加
　　8日　国際学習出前講座「ラオスの森・村のくらし」（平楽中学校）
　　12日　地球の木サロン「実践英会話」
　13~15日　第10回南北コリアと日本の友だち展参加
　　14日　第11回ブランチ連絡会
　　17日　相模原農業体験
　　19日　第15回理事会
　　22日　かまくら市民活動の日フェスティバル参加（三浦ブランチ）
　　地球の木サロン「エッセイ修行」「ハングルに親しむ」
　　29日　第11回総会

ネパールスタディツアー2010報告会

「幸せを分かち合う」ってどんなこと？
3月にマンガルタール村を訪問したメンバーがそこで出会った人たちや村のくらしを通じて考えたこと、感じたことを語ります。

日　時：2010年6月26日（土）14：00～17:00
場　所：藤沢市六会地区予定

今年度も来年2月にスタディツアーを計画しています。興味のある方はぜひお越しください。詳しくは、同封のちらしをご覧下さい。

オープンオフィス・地球の木カフェ ★★ サマーフェア ★★

日　時：7月21日（水）11：00～18：00
場　所：地球の木関内事務所

恒例の地球の木カフェです。訳ありグッズをプライスダウン。地球の木カレーと冷たいゼリーで夏を吹き飛ばそう！詳しくはちらしをご覧下さい。

港南台国際協力まつり2010 ～せかいの種、みぃ～つけた！～

地球の木「なんぶブランチ」がチャパティ＆チャイで出店します。お手伝いしてくれる方を募集しています。国際協力NGOの活動紹介や民族舞踊などのステージ、フェアトレード品の販売もあります。夕涼みにいらしてみませんか。

日　時：2010年7月24日（土）・25日（日）
　　15：30～20:00
会　場：港南台テント村（JR港南台駅前）
主　催：（特活）横浜NGO連絡会
　　横浜港南台商店会

第28回開発教育全国研究集会

日　時：8月7日（土）「実践フォーラム」
　　「フルモデルチェンジして再登場マジカルバナナV3」
　　地球の木は、改訂したマジカルバナナを紹介します。
日　時：8月8日（日）「研究フォーラム」
場　所：JICA地球ひろば
　　（東京メトロ日比谷線広尾駅下車（3番出口）徒歩1分）

地球の木サロン 心のビタミン。あなたの生活を豊かに！

ほとんどの講座は1ヵ月に1回。忙しいあなたにも参加していただけます。現在は「実践英会話」「ハングルに親しむ」「Tea & Talk」「エッセイ修行」の4講座を開講しています。
お問合せ・お申し込みは地球の木事務局まで

異文化×異世代ミックス・ジュース 「横浜下町パラダイスまつり2010」

横浜最後の名画座シネマ「ジャック＆ベティ」を拠点に、在日（日本、タイ、韓国、中国など）の近隣の国際色豊かな商店を巻き込んだアートな祭りと映画祭を開催。港横浜の裏通りの魅力を密かに探求します。昨年に引き続き地球の木は今年も出店予定です。

会　期：2010年8月28日（土）～9月5日（日）
会　場：①シネマ・ジャック＆ベティ
　　②横浜市中区若葉町界隈の商店
主　催：ART LAB OVA(アートラボ・オーバ)
共　催：シネマ・ジャック＆ベティ

ジャック＆ベティでは、地球の木が取り扱っているフェアトレードのコーヒーや紅茶を販売しています。

あーすフェスタかながわ2010

あーすフェスタかながわは、世界の料理、ステージ発表、ダンスや民族音楽のワークショップ、バザールでの民芸品販売、フォーラムなどをとおして、多文化共生について考がえるイベントです。2000年から始まり、第11回目の今年は9月開催です。地球の木は支援地のグッズ販売、ちぢみの屋台と「ともだち展」の企画で参加します。

日　時：9月11日（土）・12日（日）
場　所：あーすぷらざ（地球市民かながわプラザ）
　　リリス（栄区民文化センター）
　　神奈川県横浜市栄区小菅ケ谷1－2－1
　　（JR根岸線「本郷台」駅改札を出て左手）

一緒に企画しませんか？

あーすフェスタかながわは、いろいろな文化背景を持つ県民が集い、アピールする場です。県内の外国籍の人たち、NGO、 市民ボランティアなどが 企画段階からともに力をあわせ開催しています。 企画から参加していっしょにフェスタを作りませんか？ 関心のある方は地球の木事務局まで。

カンボジア・ラオスの織物展 伝統の美・アジアの美

織りの専門家でもあり、地球の木カンボジアチームの大薮さんが6/24に「布」の話をいたします。

日　時：6月24日（木）～30日（水）10：30～17：00
　　（但し6/26・27はお休みいたします）
場　所：WE21ジャパン相模原スペースWEWE
　　相模原市若松4-13-3-102
　　（小田急線「相模大野」駅からバスにて「東通り停留所」下車　徒歩1分）
問い合せ：スペースWEWE　TEL 042-744-9799

未使用切手、書き損じハガキがありましたらご寄付ください

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

PRINTED WITH SOY INK™
環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています